

Title	精神技術学に関する若干の新刊書の紹介と批評
Sub Title	
Author	藤林, 敬三
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1934
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.28, No.4 (1934. 4) ,p.531(83)- 548(100)
JaLC DOI	10.14991/001.19340401-0083
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19340401-0083

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

精神技術學に關する若干の新刊書の紹介と批評

藤 林 敬 三

Der Mensch und die Rationalisierung, Bd. III, Eignung und Qualitätsarbeit, herg. vom Reichskuratorium für Wirtschaftlichkeit, Gustav Fischer, Jena, 1933, S. 309. (RKW-Veröffentl. Nr. 87.)

本書は「人間と合理化」の第三卷として最近公刊せられたものであるが、その第一卷は、既に一九三一年の初頭に Fragen der Arbeits- und Berufsausbildung, der Berufsausbildung und Bestgestaltung der Arbeit の副題の下に公刊せられて居る。そしてその第二卷 Mensch und Arbeitsgerät は總て近く公刊せられる豫定である。

ドイツの合理化局(RKW)が、産業上の人的要素を無視しては一切の合理化方策は無益に終るであらう、との見解の下に、ドイツ産業の合理化的努力の内に、或はそれに對して、精神技術學の實踐の重要なことを指摘したのが本書「人間と合理化」である。そしてその第一卷は、副題がこれを示してゐるやうに、職業的選板、職業教育及び作業の合理化といふ精神技術學の三つの重要な部門に關する問題の指摘を主眼とし、且つこれ等の實際問題に關しては公私の諸機關の手に於いて、特に各種産業部門の産業經營自體に依つて、如何に廣くドイツ國內に於いて問題解決の實踐的努力が拂はれてゐるかを示してゐる。これに對して今私が此處に紹介しやうとするその第三卷は、ドイ

ツ國內の各處に於いて行はれてゐる精神技術學の實際的方法とその實用的効果とを知らうとする一般の希望に應じて、適職者の選抜と新採用者に對する教育に關する精神技術學的實踐を各種の經營の實際から集録したものである。

——尙ほ近刊を豫告せられてゐる第二卷は、その副題から觀て、これに對して *Bestgestaltung der Arbeit* の一面に關するものである。——そして本書に集録せられた六十の實例中五十二は各種産業經營の精神技術學的實踐であつて、それ等は各、(1)經營の特色、(2)A、採用方法 B、教育方法 C、A及びBの實用的價值の確定 D、以上三方法(ABC)の將來の發展、の諸點に就いて明かにせられたものである。そしてそれは鑛業及び冶金業、化學工業、電機器具及び機械製造並に電氣事業、交通機製造業、精密機械及び器具製造工業、機械製造及び造船業、纖維工業、商業、及び其の他に分類せられてゐる。勿論此處に集録せられたものがドイツ産業に於けるこの種の實踐の總てではないが、しかし集められた材料は右の諸點に就いて甚だよく整理せられてゐる點に本書の目的は十分に盡されてゐると云つていい。尙ほ本書にはポッペルロイデルの精神技術學の方法論的考察に關し、リップマンの統計的處理法に關する、共に甚だ簡單ではあるが、吾々の參考に價する見解が附加せられてゐる。

凡そ經營に於ける實際的諸方策の多くは、時に重要な理由なくして尙ほ公表せられることを望ましとせられないのであるが、これに對して本書はドイツの合理化運動の一特色たる經驗の交換と云ふ精神から生れ得たものである。従つてこの意味に於いて、本書は先づ一般に産業界の實際家に對して刺激と參考の十分の材料を提供し、また吾々に取つては容易に集め得ない實際的研究資料を豊富に提供して來れてゐると云つていい。そして本書の存在は特に吾國の如く精神技術學の理論と實際が、未だ比較的遅れてゐる處に於いては、學者たると實際家たるとを問はず精神技術學に關心を有するものに取つては、甚だ興味ある文献であると云はねばならない。

最近の諸種のドイツ文獻を読む者は恐らく一様に、ヒットラーの影響が、色々の方面に現れてゐるのに氣付くであらう。私も既に二三の場合にこの點に氣付いてゐたのであるが、本書の如きも亦ナチスの思想に明かに影響せられてゐると見做し得るもの一つであらう。かくて今やドイツに於ける精神技術學は、ナチスの思想に従つて、現在のドイツの國民經濟的再建過程に於ける有能なる人物の要求を意識的に認めてゐる。從來精神技術學が産業の實踐に於いて求め且つ養成することを目的とした能率的な人物は、今やドイツ經濟の再建に意識的に参加するものでなければならぬ。即ち *Volks-gemeinschaft* の精神から發生する勞働意欲を勞働者に期待することが精神技術學の實踐に於ける重要な關心事である。そして特に、またそれは當然の事柄であるが、青少年の職業的教育の本旨として勞働に倫理的意義を與へることが必要だと力說せられて居り、従つてもはや勞働者を單なる客觀的な對象物なりと考へることは許されぬ。……*der Mensch mit seiner Arbeit nicht Objekt, sondern Subjekt im wirtschaftlichen Geschehen sein und bleiben muss*.ドイツの精神技術學がナチスの思想に影響せられて、凡そ右の如き見解を明瞭に意識するに至つたことに對する批評は暫く措き、吾々は此處に精神技術學が時代の指導的思想、時の政治と全く無關係であり得ないことを判然と知り得るのである。それにしても僅か數年前モスコで開かれた第七回國際精神技術學會に於いて、ソヴェート學者の批判的攻撃に對してドイツの學者が専ら、科學的研究が政治と全然無關係であることを力説したのであるが、(拙稿、精神技術學の危機、本誌第二十六卷 第十號 參考)これに對して本書の論調は當時のドイツ學者の思想を消極的に否定するものである。

E. Mayo: *The human Problems of an industrial Civilization*, N. Y. Macmillan Co., 1933, p. 194, \$ 2.00.

嚴密には、本書は精神技術學に關する直接の参考文献ではないやうに見える。けれど本書は産業上の、若しくは産業社會の人間に關する諸問題の種々なる方面の科學的研究、即ち生理學的並に心理學的研究、人類學的研究、社會學的研究等々を總括するからである。しかし本書の中心問題は、應用心理學の視角から觀て、また吾々に重要な示唆を與へるものであると云つていい。

從來は勞働能率増進の見地から、人間勞働に關する科學的研究、即ち一方では勞働生理學、他方では精神技術學が共に産業疲勞の研究を中心に發展して來た。例へば英國の『産業疲勞研究所』(今日では『産業保健研究所』と改稱)の如き、また吾國の倉敷市にある勞働科學研究所の如き共に疲勞の研究を中心問題としたのである。しかし著者の見解に従へば、今日の産業の實際に就いて觀れば産業疲勞の存在は既にその重要性を失ひつゝある。けれど一方では機械が人間の勞働に代り、他方では假令尙ほ人間の筋肉勞働を必要とする場合があつても、其處では一種の自然淘汰が行はれて不適者が何時までも過重なる筋肉勞働に苦しむことがないと考へられる。(p. 18) またそれ許りではなく、從來の疲勞研究の結果では未だ疲勞の檢出とその測定が今日尙ほ明確に解決せられては居らず、疲勞が單一の限定せられたるもの、従つて常に單一の明確なる原因たるものではない。更らに産業上吾々に重要な諸現象は常に單一の要因ではなく、多數の要因の緊密なる複合作用の結果であると見做すべきである。かくの如き見解に基いて、著者は先づ從來の産業疲勞の研究の意義を否定しやうとするものである。(Ch. I.) 疲勞の研究に對すると同様に、著書はまた單調の問題、(Ch. II.) 或はまた練習、熟練の問題(p. 75-6 參考)の如き精神技術學上の研究主題に對しても、それは單に一義的に解明せられ得ない問題であることを力説する。そしてかくの如き立場から更めて、勞働能率の問題は常に作業者の生理的、心理的狀態並にその外部的作業諸條件の諸要因の複合の結果である

と說かれるのであるが、吾々に取つて興味ある點は、著者が此處に作業者の内面的均衡狀態、勞働に對する精神的態度、作業者の氣風 *Morale* といふ問題に重點を置いてゐることである。確かにこの問題が勞働能率の増大に重要な影響を持つことは從來何人も否定しない所である。しかし不幸にしてこの問題は、今日までの精神技術學の研究と實踐の範圍に於いては、未だ充分科學的な取扱ひを受けては居ない許りではなく、多くの應用心理學者に取つてはそれは精神技術學の問題でないかの如く無視せられてゐる。そしてかくの如き狀態は凡そ二つの理由に基く。即ち從來精神技術學の人間研究は人間を余りに機械視してゐるといふ點が第一、更らに勞働に對する主觀的態度といふ問題は當然社會心理學的研究を必要とし、必ずしも所謂正確科學的研究を容易ならしめないことが第二の理由である。がしかし私は著者が此處に重要視する問題こそ眞に心理學的な問題であることを指摘して置かう。最近ドイツに於ては、例へば P. Plaut の如きは既に社會心理學的研究の重要性を認めて居り、(Handb. d. Arbeitswiss., Bd. V, Teil I, 1928) また社會心理學者の側からは勞働者心理に關する特殊研究が既に以前から行はれてゐる狀態であるが、かくの如き研究方向は今後精神技術學に新しい問題を提供するものであるといつていい。そしてそれは云ふまでもなく、作業者の勞働に對する態度を問題の中心とするものであらう。かくて本書は、私が先きに述べて置いたやうに、今日の精神技術學に對して重要な示唆を持つものである。

しかし乍ら、右の問題が本書に於いて明かにせられてゐる限りに於いては、未だ問題を充分科學的に明確にしてゐるとは云はれない。従つて吾々の期待は此の點では全く滿されては居ない。がそれは兎も角この問題は現在の各國の經濟狀態に對して甚だ重要な問題であること、そして經營管理者の問題として解決の重要が說かれてゐるのであるが、本書の序述は大體具體的實驗並に研究の紹介を通じて行はれて居り、且つ多種の科學的分野の研究を包含

して居りまた本來必ずしも専門家のためのみに書かれたものでないためであらうが、科學的研究の見地からはアメリカ本の欠點をまぬがれない。

註 私に此處には本書の内容の全般には觸れなかつたが、殘された内容の内には「社會秩序に及ぶ産業の反作用」(第六章)及び「政府と社會秩序に關する諸理論」(第七章)とがあることを附け加へて置かう。

F. Baumgarten; Die Charaktereigenschaften, Bern, A. Franke, A. G., 1933, S. 81. Fr. 3.80 (但しキヌ・ツラツ)

從來精神技術學の研究と實踐に於いて、その甚だ重要なにも拘らず、未だ充分開拓せられてゐない方面は人間の性格 Character に關する研究である。各作業者の生産力が生理的、心理的な特殊能力に條件づけられてゐることは云ふまでもないことであるが、それ以上にまた各人の性格質に依つて條件づけられてゐることも亦否定し得ない所である。(Der Mensch und die Rationalisierung, III, S. 242)既に知能の研究が、各國の心理學者に依つて進められ、精神技術學の實踐に對しては今日それが適當に利用せられてゐるのに比較すれば、性格の考慮は精神技術學の實踐からは未だ遠く隔つてある。知能検査に對して、例へば最近吾國に於いても情意検査(桐原)性向検査(淡路、岡部)の如きものが、發展せしめられてゐるけれども、更に深く性格或は氣質の研究が精神技術學者に依つても亦發展せしめられねばならぬであらう。しかし勿論、從來性格に關する研究が全然欠除してゐたのではない。それは多くは性格異常者に就いての研究、若しくは精神病學者の研究であつて、精神技術學の實際を企圖するものに取つてはかくの如き研究は必ずしも直ちに有用のものではない。かゝる状態が精神技術學の研究に従事する著者をして、

數年來正常人の性格に關する研究の必要を痛感せしめた所以であつて、正に本書は著者の性格學的研究の理論的基礎を明かにしたものである。

著者の見解に従へば、「性格質 Charaktereigenschaft とは人間の、その環境に於ける、能動的な、また反應的な態度 (Verhalten) を決定する恆常的な心理的照準力 Richtkraft である。」そして性格質としてのこの心理的諸照準力が、吾々が性格と稱する特殊の構造を持つ全體を構成し、人格に對する特質を條件づけるものである。かくの如き著者の見解は凡そ次ぎの諸點に於て特色を持つものである。即ち第一にはそれは人間の自己保存と自己成育といふ生物學上の見解から出發して居り、第二にそれは性格概念と人格概念との混同を避けんとする——著者に從へば、性格質は(1)感覺、思考及び注意と記憶、(2)感情と情緒、(3)衝動、本能及び傾性、(4)知能、(5)氣質、(6)特殊の才能と共に全體としての人格を構成するものである。——第三には最も普通に行はれる見解、即ち性格を意志に結びつけやうとする見解に對して、意志は單に一つの性格質に過ぎないものであると考へられて居り、第四に總て性格質は恆常的であるといふのは云ふまでもなく、それが生來素質として考へられてゐる、等の諸點である。

しかし性格質が人間の態度を決定すると云ふけれども、その間には決して一義的な關係が存在するのではない。即ち人間の態度は常に必ずしも單に性格質のみに依つて規定せられるものでもなく、また同一の態度は種々なる性格質に依つて、或はまた同一の性格質が種々なる態度を條件づける。其處で人間の態度の解釋に依つて個人の性格を研究せんとすることが、如何に容易ならざるかを示すと同時に、著者はまた人間の態度を直ちに性格質に結びつける素朴的な見解の不當なることを充分に示してゐる。

更に著者は總ての性格質を形式的には、(1)全體的、構成的、(2)部分内容的なものに、また内容的には、(一)自

已關係的(Lebenscharakter) (1)環境關係的(Sozial- und Arbeitscharakter)なものに分類する。

かくの如き著者の見解の内、例へば著者は總ての性格質が恆常不變であることを説くのであるが、性格概念規定のこの一面は、素質としての知能が必ずしも恆常不變のものでないことを説くものに依つては直ちに賛同を得難い點であらう。また著者の性格理論に關する見解は、一般に素質としての知能及び氣質に對して性格が如何に限定せられるかの問題を含むものであるけれども、それ等の問題に就いては至極簡単に觸れられてゐるに過ぎない。(S. 16-19.) 従つて右の問題に關する讀者の理論的要求は本書に依つては未だ充分満され得ないのは甚だ遺憾である。がしかし精神技術學的研究に於いて性格研究の重要性を思ふものに取つては、本書が、精神技術學者に依つて今後益々開拓されて行かねばならない新しい研究方面に對する、價值ある参考文献たることに就いては異論のない所であらうと考へられる。

尙ほ本書に附加せられたる二つの附録は共に本書の特色を充分に現はしてゐる。その一つは性格質を示す多數の言葉が集録されてゐることである。(即ち形容詞九百四十一、名詞六百八十八、合計千六百二十九、但しその内五百三十六の言葉は形容詞と名詞とに存して居り、従つて結局千九十三の言葉が性格質を示すものとなる。)更に第二に四十三の種々なる態度に就いての分析が、即ち如何なる性格質がそれを條件づけてゐるかが例示されてゐる。

最後に附言して置き度いことは、本書は著者自身の編輯する Beiträge zur Charakter- und Persönlichkeitsforschung の第一巻として最近公刊せられたものであつて、吾々は讀者と共に、今後著者並に著者の協同研究者達の性格學的研究が本叢書中に現はれて來ることを期待し、同時にこの機會に著者の云々 terra incognita である性格研究に對して、益々多數の精神技術學者の注意を喚起し度いと思ふ。

次ぎに紹介するものは吾國に輸入せられてから既に一年を経過して居り、従つて或は新聞書と稱し得ないものであらうけれども、紹介の意圖を持ち乍ら遂にその機會を失して居たので、便宜上この機會を利用して新たに讀者の注意を喚起して置き度いと思ふ。

H. J. Welch and G. H. Miles: Industrial Psychology in Practice, London, Sir Isaac Pitman & Sons, 1932, p. 262, 7 s. 6 d.

本書は、書名がこれを示してゐるやうに、産業心理學の内容を斷片的な實踐的研究の結果に依つて傳へたものであつて、全然理論上の問題に觸れることを目的としてゐない。この特色は、それだけに、何人に取つても亦便宜である。即ちそれは一方では産業心理學(英國では常にかく稱せられる)或は精神技術學の内容を何人にも明白に示し得てゐると同時に、他方では個々の場合の實踐に對する暗示を充分に含んでゐるからである。——勿論先きに紹介した Der Mensch und die Rationalisierung, III. に比較すれば、本書の内容をなすものは甚だ簡單な斷片的な研究結果に過ぎないものであつて、この兩書の價值は直ちに同一に論じ得ないものであることは明かである。——そして本書に集録せられた精神技術學の實踐的諸例は時に歐米諸國のものであるが、英國以外のものは極く小數であつて、殆んどその大部分は英國の實際、また特に本書の兩著者が關係する『國民産業心理學研究所』が『産業疲勞研究所』と協同して行へる實踐的研究の所産(それは既に Reports of the Industrial Fatigue Research Board として知られてゐる)の斷片的な再録である。従つてまた吾々は、本書に依つて、英國に於ける斯學の發達の現状とその産業界に於ける實踐的意義とを概略これを知ることが出來るといつてよい。(云ふまでもなく『國民産業心理學研究所』

は英國に於ける精神技術學發展の最大の中心機關である。

本書は産業心理學の實踐的研究の所産を次ぎの如き内容に従つて系統化してゐる。

第一篇 労働者の健康と作業諸條件の改良。

第一章 疲勞の軽減。(a)労働時間と休憩。(b)疲勞と單調。(c)作業方法、道具と機械。(d)運動研究と律動。

第二章 作業環境。(a)照明 (b)暖房と通風 (c)騒音

第三章 災害

第四章 經營の内部組織。(a)計畫、指令、設計 (b)貨物の運搬と取扱ひ (c)時間と材料の浪費

第二篇 人事

第五章 新被傭者の選定と訓練。

右の内第一篇は時に作業心理學と稱せられるものに相當するものであつて、労働能率の増進の見地から産業疲勞の問題が中心をなしてゐると見てゐる。そして第二篇の適者の選定と教育の問題が本書に於いて示める割合から觀れば、第一篇の中心問題はその數倍の頁數を占めてゐる。このことは英國に於ける精神技術學の發展の現狀を明瞭に示すものであつて、またそれは上述の如く産業心理學の發展が主として「産業疲勞研究所」との協同の下にあつたことにも因るのではあるが、吾々は此處に英國の精神技術學の發展が今日尙ほ他國に比して、職業心理學並に労働者の教育問題といふ方面に於いて確かに遅れてゐることを認めなければならぬ。

本書の内容中特に第四章の問題の多くは、一例を示せば一作業場内に於ける機械の配置を如何にすべきかと云ふ

が如きが如き問題は、一般に能率問題からは云ふまでもなく重要な問題ではあるが、産業心理學の問題としては直接重要な關係を持つてゐない。が著者の見解に従へば、事實有ゆる産業上の問題が産業心理學と多少とも關係するといふのである。しかし吾々には精神技術學の問題として更に重要なものが他に存することを、さう云ふ彼等が輕視してゐるのは甚だ遺憾であると思へる。勿論、本書の最後の附言を見ると、著者は其處で廣告心理學の問題を指摘した後に、例へば被傭者間の調和的關係、彼等の協同的、社會的態度といふやうな點に簡單に解れてはゐるが、これ等の問題は彼等の、一般に英國の産業心理學者に取つては全然今後の問題である。

G. H. Miles; The Problem of Incentives in Industry, London, Sir Isaac Pitman & Sons, 1932, p. 60, 3 s. 6 d.

本書の表題が示す、産業上の Incentives の問題は、それに因つて期待せられる産業關係者のその各の仕事に對する態度、更らに彼等の産業上の活動の動機に關する問題と相應するものであつて、既に英米兩國の文獻に於いてはこの種の問題が色々な視角から論ぜられて來てゐる。この Incentives の問題は、吾々の興味から云へば、英米流の問題提起の仕方であつて、それは當然現實の生産關係の内、労働者の労働に對する主觀的態度が事實如何なるものであるかの現實的な分析的研究を必要とする。

著者の云ふ所に従へば、企業成功の度、企業の内活動する總ての人々の活動が、企業の利益となるやうに喚起せられ、且つ利用せられる程度に依存する。(p. 2) 其處で労働者に對しては適當な Incentives を與へて、彼等の労働の能率を増進せしめることが、企業管理者の重要問題となる。これに對して本書は一般に如何なる Incentives を與ふべきかを説くものであつて、私が先きに指摘したやうな労働者の労働に對する主觀的態度の分析的研究

の如きは、此處では全く問題とせられてはゐない。従つてこのことから直ちに何人も容易に推測し得るやうに、本書の所論は單なる一ケの常識的見解以上のものではなく、且つ本書の内容はロンドン大學に於いて講述せられたものであるといふにも拘らず、本書の内容が簡単な現實的諸關係の分析さへ殆んど無視した一ケの常識論に過ぎないと見られる程のものであつて、従つて吾々には本書の學術的價值を余り高言することは不可能である。

批評を先きに述べたが、大體著者の見解は凡そ次ぎの如くである。労働者に對して解雇その他の刑罰的方策を用ふることは著者の賛成しない所であるが、また單純なる出來高拂賃銀から利潤分配、或はまた労働者の持株制度に至るまでの金銭上の刺激は、労働者の個人主義的態度を助長し、結局には反社會的結果を見る懼があると考へられてゐる。そして著者が主張する適當なる Incentives とは、短言すれば、労働者に協同的精神を喚起するが如きものでなければならぬ。それは當然労働者の一般的幸福と、彼等の生活と労働に對する關心とを充分考慮したものでなければならぬとせられる。著者はかくの如き根本的主張を具體的な數ケの場合の例に於いて解説してゐるのであるが、彼のこの主張は彼の次ぎの如き思想に基くものである。即ち産業の主たる目的は利潤の追及にあるのではない。かくの如き一方的な見解は必然社會的分裂に至る。産業の竟局の眞の目的は總ての階級の生活諸條件の改善にある。(p. 55-6) 私は此處でこの種の思想の批判を加へる余猶を待ない。唯だ吾々はこの種の思想が尙ほ竟局、企業、利益のために繰返し労働者に對して宣傳せられる雇主の思想であることを附言して置けば充分であらう。

同じく Incentives の問題が、本書の著者と異つて、社會主義的な立場から書かれたパンフレットとして昨年来國で出版せられたものがある。内容は資本金家、經營管理者、技師、労働者等、經營活動に参加する總てのものを含んで居り、従つて素より順序は簡單であり、且つ不充分であり、不満足である點も甚だ多いが、この問題に關する科學的研究に關心を有する者には尙ほ多少の參考となり得るものである。序に此處に紹介して置くのも無益ではなからう。著書は次ぎの如くである。

H. W. Laidler; Incentives under Capitalism and Socialism, publ. by the League for Industrial Democracy, N. Y., 1933, p. 54, 15 Cents.

C. S. Myers; Business Rationalisation, its Dangers and Advantages considered from the psychological and social Standpoints, London Sir Isaac Pitman & Sons, 1932, p. 83, 3 s. 6 d.

英國に於ける精神技術學の中心が『國民産業心理學研究所』にあることは私の既に述べた所があるが、本書の著者は同研究所々長として英國に於ける最も著名な應用心理學であつて、また既に數ケの彼の著作を通じて廣く世に知られてゐる。此處に私が紹介せんとする彼の著作は、一時世界各國の流行の問題となつた合理化問題に關するものであつて、既に各國の多數の應用心理學者が合理化問題に多大の關心を示したのであるが、その多くは單に産業心理學の實際が經營合理化の方策の一部としてそれ自身の問題を解説するに過ぎなかつたのに比較すれば、本書は多少異つた特徴を持つてゐる。著者は本書に於いて、合理化の意義を明かにすると同時に、産業心理學の問題の所在とその重要性とを説くことを主眼としたと見做してよからう。

本書は三章から成り、合理化の意義、その弊害及びその利益とを順次論述して居り、その第一章に於いて合理化の意義を明かにするに當つて、産業生活の發展、經營の發展を生物學上の事實と對照してこれを説いてゐる。換言すれば經營の發展並にその組織を、有機體の發展並に組織の個々の部分の有機的關聯の視角から觀て、合理化の意味と

その重要性とを明かにしやうとする。そして同時に、本書に云ふ社會的立場から、過去と現在とを批判し、將來に對して眞の合理化の發展を説く。著者が合理化問題を生物學的、心理學的、社會的立場から論述したと云ふ所以である。(p. V.) 著者の解する「合理化」は、一經營内の科學的管理の問題を包含すると同時に、更らに企業結合の問題をも含む。そして合理化は單に一企業内の浪費を排除することを目的とするのみならず、結合企業全體内の浪費を、更らに竟局は産業全體、社會全體、人類全體を通じての浪費を取り除くことを目的とする。かくて物質上の、時間上の、また人間の勞力上の一切の浪費を減少することに依つて人間生活の一般的繁榮と幸福とが期待せられ得ると考へられてゐる。かく解せられた合理化の見地から、著者は種々なる經濟的、社會的問題を取扱つてゐるが、産業心理學の問題としては、巨大企業の出現、企業結合の發展と共に、一般に益、勞働者の個性と人格が考慮せられなくなり、彼等の興味も苦情も無視せられ、彼等は單に自動機の水準にまで引き下げられ、彼等の發明的創意は阻害せられ、彼等の才能は適當に顧みられなくなるといふ事實と傾向に對して、眞の合理化は單に物質的繁榮のみならず、社會乃至全人類の肉體的、精神的、道德的福祉の増進を目的としなければならぬと著者は主張する。

著者は合理化過程の内に、右の悲觀的事實に對して、産業活動の人的要素に關する産業心理學の問題を略、適當に指摘し得てゐると云つていい。そして此處に述べられてゐる著者の社會的立場なるものは英國の産業心理學者の共通の思想的背景であると見ていい。——勿論、今日資本主義諸國の精神技術學者は總てこれと大體同様の見解を持つてゐることも事實ではあるが——しかし本書の著者が、産業心理學の問題を稍、適當に指摘してはゐるが、その社會的立場の理想論乃至樂觀論は、資本主義的企業は一切の實踐が、常に利潤の考慮を離れては存し得ないものであり、從つて其處に最後の重大な限界が存在してゐることを輕視して居ると云はなければならぬ。今日の精神技術

學者の見解に欠けてゐる最も重要な點が正に此處にあることは、私が既に他の機會に批判した所であつて、この限りに於いては本書も亦特別新なる見解を吾々に提供するものではない。

E. Farmer; The Causes of Accidents, London, Isaac Pitman & Sons, 1932, p. 95, 3 s. 6 d.

災害に關する研究が經營政策或は社會政策の上から見て從來重要視せられて來てゐることは今更らに此處に繰返すまでもない。本書は災害に關する科學的研究の一般を述べ、且つ災害減少のために行はるべき經營の實際的諸方策を論じたものであつて、著者は本書に於いて詳細な科學的研究を企圖せず、寧ろ科學者でない經營の實際家に對して災害減少方策を示すことを重要なりと考へた。そしてこの目的は本小冊子に於いて可成よく行はれてゐると云つていい。然かも尙ほ災害に關する科學的研究をこれから行はんとするものに對しても亦本書は充分問題の所在を明かにし、且つ卷末に附加せられた参考文献は、勿論それだけでは不充分ではあるが、この著者の用意を窺はしめるものである。何れにしても本書は實際家と初歩の科學的研究者に對して災害に關する諸問題を適當にまとめた良参考文献として充分價值あるものと云つていい。

第一に本書は經營に於ける勞働諸條件の内から、また勞働者の年齢或は經驗の考慮から災害發生の一般的諸要因を簡單に論述し、第二に災害に對する個人的 proneness の問題を論じてゐる。即ち作業者中には特に災害に陥り易い傾向を持つた少數のものが居て、災害率を増大せしめるといふ事實が大體確定せられてゐる。そしてこの問題は最近に於ける災害研究中最も興味ある問題であるが、一方これに關する科學的研究は現在尙ほ總ての點に就いて盡されてゐるのではなく、將來の解決に待たなければならぬ問題も存し、——例へば災害の proneness は一般的のもの

であるか、或は作業の客觀的諸條件に對して相對的のものであるかは未だ全然明かにせられてはゐない(p. 79)——他方また proneness を規定する諸因が未だ充分明確にせられては居らぬ。しかし著者の研究の結果或る種の心理學的テストが proneness を持つものを豫め検出し、從つて災害を減少するに實際上役立つものであることが明かにせられてゐる。しかし著書のこの研究だけで理論上また實際上 proneness の問題が解決しつくされたのでなく、吾々は著者と共に精神技術學のこの方面に於ける今後の研究の發展を期待しなければならぬ。最後に本書は經營の各部に於ける災害調査の具體的方法を論じ、實際家の右の問題への接近を提言してゐる。

災害研究に關する科學的努力は尙ほ多く行はなければならない。しかし本書の具體的提案は、それだけでも、災害數を實際減少せしめるに役立つものであることは著者の自信する所であつて、本書は特に經營の實際家の一讀の價值を充分に持つてゐる。

G. P. Crowden: Muscular Work, Fatigue, and Recovery, London, Isaac Pitman & Sons, 1932, p. 83, 3 s. 6 d.

本書は筋肉労働と疲労とその恢復といふ一連の事實に關する生理學的研究を明かにし、且つ産業労働の實際に關するこの生理學的研究が生産能力の増大、労働者の健康の増進、長年月に渡る生産能力の維持といふ問題に對して重要であることを説くものであつて、著者はこの研究が労働者に對して、また産業上にも重要であることを力説する。この労働生理學的研究は精神技術學的研究と共に生産労働の合理化に對して重要な役割を演ずるものであることは此處に論ずるまでもない。この二つの研究部門は生産労働の實際に關する人的技術を基礎づけるものである。即ち一方は労働の生理學的方面に關し、他はその心理學的方面に關する人的技術を實踐的に發展せしめる。そして

この二つの部門は本來科學的視角を異にするものではあるが、生産労働に關する實踐的な問題の解決に際しては多くはこの兩面が協同して同一問題の合理的な解決に資するものであつて、例へば本書の主題である疲労の問題の如きは從來應用心理學者も亦心理學的方法に依つて實踐的な研究に参加して來て居り、云はゞ産業疲労の問題の如きは從來労働生理學と精神技術學との共同の問題と見做されて來たものである。從つて精神技術學に興味を有するものに對してもこの種の生理學的研究の一應の理解が必ずしも無益ではない。

本書は筋肉労働—疲労—その恢復に關する生理學的研究の一般理論的説明を概説したる後に、具體的な産業労働に關する生理學的研究を紹介してゐる。元來著者は疲労に影響を持つものとして仕事の性質、作業環境の要因、時間的要因及び個人的要因の四つを擧げるのであるが、具體的な労働に關する研究に於いて本書が主として吾々に紹介する所は仕事の性質——輕易なる仕事、甚だしく力量を要する仕事、或は中位の仕事、一般には仕事の難易の相違——と作業環境——氣温、通風、照明——との optimal な限定の研究であつて、其の他の要因、特に個人的要因に關しては單に問題の所在を指摘してゐるに過ぎない。勿論この小冊子に對して總ての問題の充分なる解説を期待することは余りに多くを望むものと云はねばならない。本書に解説せられてゐる主要方面は從來の労働生理學的研究の内で比較的進歩せる部分である。

この労働生理學的研究が、經營の實際家に對して、精神技術學的研究と同様に重要であることは云ふまでもない。そして本書は先きに紹介した H. Fanner の災害研究と共に、本來科學者のために公刊せられたものではないのである。

以上私の紹介した五著作は共に『國民産業心理學研究所』の贊助の下に公刊せられたものであつて、尙ほこれ等の著作と殆んど同期に同一出版所から次ぎの著作が公刊せられて居たのであるが、不幸にして私は今此處にそれを同時に紹介し得なかつたのは甚だ遺憾である。著書は次ぎの如くである。

H. J. Welch and C. S. Myers: *The Ten Years of Industrial Psychology: An Account of the First Decade of the National Institute of Industrial Psychology*, 1932.

書名から見て、本書は『國民産業心理學研究所』の創立以來十年の發展を記録したものであつて、私が先きに述べたやうに、それはまた英國に於ける産業心理學發達の最近の狀態を傳へたものと見做し得るであらう。かくて本書は少くとも精神技術學に關心を有する何人に取つても興味ある著作たるものであらうと考へられる。従つて讀者に對して本書の存在だけでも指摘して置くことも決して無意義ではなからう。

(昭和九年三月十三日)

パスカル著「獨逸宗教改革の社會的基礎」

高橋 誠 一 郎

劍橋大學ペンブルック・カレッジ研究員アール・パスカル(R. Pascal)の著 *The Social Basis of the German Reformation*. Martin Luther and his Times. が昨一千九百三十三年倫敦に於いて出版せられた。本書は單に新たな宗教上の原理を提唱せるマルチン・ルーテルの事歴を記述せんとしたものではなく、獨逸中世的制度の崩壊に於ける主要なる動因の一を形成し、而して新社會の基礎を組織せる一階級の指導者として彼れを説明せんとせるものである。(Foreword, p. viii.)

是れ迄、ルーテルに關して記された著書の大多數は彼れが法王權に對して戰つた戰鬪を反復する。然しながら、彼れが加特力教會に對して其の猛襲を行つた時、彼れは單なる教條の一團、若しくは單なる教會の慣行に反對したものでなかつた。加特力教會は、彼れの時代に於いては、本來の俗權と相並んで存在しつゝある非常なる大さと力とを有する一の政治的制度であつた。其の神學は一俗權としての加特力教會の存在の是認を含有する。教會神學の推定に對するあらゆる攻撃は、悉く制度としての教會に對する攻撃たらざるを得ない。而して斯くの如き攻撃は

パスカル著「獨逸宗教改革の社會的基礎」